諏訪神社と奥井氏

林　寅喜
（会員・佐伯市中の島）

木立の須留木地区、集落の中程を少し登った山中に諏訪神社という、間口二間半に奥行き三間程の小さな社がある。祭神は建御名方命で、長野県諏訪市にある諏訪大社の末社になる。

この社が創建されたのは今から二百七十一年前の享保四年、六代藩主高慶が側室奥井氏の要請によって勧請したとされている。

奥井氏とは、元禄の初めごろ杵築から宇山に移り住んで、後に藩医となった奥井斉沢の娘（後記）で名を志幾子といい、七、八人はいたという側室の中で、最も寵愛されていた女性であったといわれている。

ここ須留木は、木立でも人が住むようになった歴史は比較的新しく、前記享保のころには山裾まで海面が迫っていて、現在の水田地帯に全て湿地か葦の生えた不毛の土地であった。ここに稲が作れるようになったのは、寛政のはじめ（一七八九）から天保の終り（一八四三）にかけてではないかと考える。その理由を藩政時代の御帳によって木立の生産高から調べてみると、正保年間（一六四四－一六四七）には六百七石三斗四升であったものが、元禄（一六八八－一七〇三）のころには六百六十一石三斗五升五合となり、更に天保（一八三〇－一八四三）に入ると千九十石七斗九升六合二勺八才と急激な伸び率を示している。これらの殆どは須留木から築良田地区の前と、沖田の干拓によって水田が生まれ、生産高が倍増したものと考えられるからである。

では、このような住む人も少ないわびしい寒村に、一体、どんな理由で諏訪神社を祭祀するようになったのか、その理由を知りたいと私は思っていた。ところが、最近になってこの社が初めて創建されたときの位置は現在地ではなく、茶屋が鼻であったと聞いた。

そこで、それが事実か否かについて二、三の古老に確かめてみたところ、ほぼそれに間違いないということが分かった。しかし、確証となるものは何もなかった。それならばと、今度は独自に調査を進めていくうちに手掛

かりとなるものが二つあった。

その一つは、以前、一度目にしたことのある木立の古地図である。これは、今も図書館に保管されている。

そこで、これを再度閲覧してみると、確かに該当する土地があった。地番も五八六〇と記入してあり、国有地として色分けまでしてある。更に、この古地図の作成された年代を知るため、表題に書いてあった。

豊後国海部郡
第四大区二八小区
戸　長　田川儀十郎
副戸長　宮崎民五郎
木立村総代
歳納　覚太
成迫　又平
堅田村
戸　長　須田　益夫
総代
脇田周五郎
疋田　藤一

なる人物について、佐脇貫一氏を尋ねてお聞きしたところ、戸長田川儀十郎と須田益夫の両名は何れも旧藩士で明治八年から十年の役職であったと教えてくれた。したがって、この古地図は、現在の土地台帳の原本である明治二十一年に作成されたものより、更に十年も前のものであることが分かった。

また、同じ土地が、二十一年の方は六九九四番地となっており、神社跡地（官有地）として登録されている。そうすると、神社が移転した時期は、明治十年以降二十一年までの間ということになる。

その二つは、昭和三年に木立小学校が編集したとされる郷土読本というのが最近見つかり、この中に諏訪神社のことが取り上げられているからである。

それによると、高慶は、茶屋が鼻に茶亭を建てて、しばしば舟遊びを催されたと書いてあり、或る年の舟遊びで、誤って腰の刀を海に落としてしまい、慌てた家臣たちが海へ飛び込んで探したが見つからなかった。そこで、すぐ上手に鎮座まします諏訪神社へ祈願したところ、海底にキラリと光る刀を発見したという。高慶は大いに喜んで即座に

何事も祈る心にまかせつつ

なおしも守れ諏訪の神垣

と詠んだ短冊を奉納されたと書いてあり、これは今も社殿に掲げている（写真参照）。

これに似たような話は外にもあり、出来すぎているという感じがしないでもないが、歌の持つ意味からすればあるいはこのような事があったのかもしれない。

なお、高慶が建てたという茶亭は郷土読本では茶屋が鼻となっているが、当時の地形を考えてみると、茶亭など建つ余裕の土地などなかったと思う。それに風当たりも強く、好ましい場所ではない。むしろ神社のすぐ下、

今の津志河内橋の付近、山の尾根が落ちた所辺りではなかったろうか。あそこなら舟遊びの場としても最高の位置で日当りも良いし、波も静かである。

この諏訪神社が創建された享保四年は、高慶が四十五歳の時で、側室志幾子は何歳であったのか分からない。また、側室に上がった時期も不明であるが、高慶が藩主となって佐伯に帰ってきたのが元禄十四（一七〇一）年二十七歳の時であるから、それ以降には違いない。死亡したのは享保十五（一七三〇）年七月十七日で、法名は智覚院殿量誉慈仙寿心大姉、墓は潮谷寺境内にある。

では、どんな理由で、ここに社を創建したのだろうか。先に述べた郷土読本によると、ここに茶亭を建てたのは元禄の末となっており、これがもとで茶屋が鼻と呼ぶようになったとしている。

当時は、付近に人家もなく、僅かな窪地があったくらいで、舟着きには便利な上、城下にも近く、御供の警護に気を配る必要もないので、安心して一日を過ごせることが出来たと思う。それに景色はいいし、波は静かで、魚も取れる申し分のない所であったに違いない。

一方、高慶は神仏に対する崇敬の念厚く、藩主在任中

の四十三年間に、数多くの寺社建築と復興に努めている側に仕えていて、このことをよく知っていた志幾子が、神社勧請の適地と考えて高慶に願い、創建の運びとなったのであろう。

では、何故社を移転するようになったのか。

ご存じのように、明治四（一八七一）年七月の廃藩置県によって、藩政は太政官政府に移管され、それによって、これまで藩で管理していた諏訪神社は、行政区となる木立村が管理することになった。しかし、村には熊野神社（明治六年村社となる）をはじめ、各地区にはそれぞれ守護する社や祠がある。最終的には須留木の所管とならざるを得なかった。ところが、地区が管理し、祭祀するには、部落の外れにあって何かと不便である。殊に佐伯町との往来のため重視されつつあった道路の整備に支障するとして、地下の奥に移転の運びとなったのではあるまいか。その真意は定かではないが・・・。

この神社跡地は、現在、三八八号線用地となって殆ど残っていない。

奥井氏について

潮谷寺の過去帳によれば、志幾子の法名欄には奥井春耕妹と書いてある。年齢は記載していない。したがって、二代目春耕（宝樹院）の妹、つまり初代春択（悟心院）の娘ということになるが、どうも違うような気がしてならない。

その理由を分かりやすく解説するため、諏訪神社が創建された享保四（一七一九）年に、志幾子の年齢が二十歳であったと仮定すると、兄の春樹は、この時少なくとも二十四、五歳でなければならない。この二代は、これより四十八年後の明和四（一七六七）年に死亡しているから、七十二、三で没したことになる。それはまあよいとして、死亡七年前の宝暦十（一七六〇）年に三代春耕（洞雲院）が誕生しているから、六十五歳ごろの子供（多分庶子であろう）となるので、これがいささか無理なように思えるからである。ただし、例のないことではない。

例えばその一つ、子供を諭すのに三本の矢を使ったことで知られる毛利元就は、元亀二（一五七一）年六月、七十五歳で死亡したが、七十一歳の時、九男小早川秀包

が誕生し、家康の場合も六十三歳の時、水戸頼房が誕生しているからである。しかし、これらは公家や大名などごく一部の人たちで、当時の一般社会では通用しなかったであろう。

次いで、初代春沢（春耕とも呼んでいたのではないか）の経歴を見ると、彼は若いころ杵築藩に仕えていたが、故あって堅田の宇山に移り住み、藩の家老某の難病を治癒したのが縁となって藩医に任用されている。したがって、佐伯に来たころには一人前の医師として生計を立てていたと思われるので、高慶が藩主となった元禄十二（一六九九）年ごろには壮年期に入っていたであろう。死亡は、享保十（一七二五）年となっているので、先の元禄十二年からは二十六年後のことになる。年齢は分かっていない。

このころには、二代も三十代に入っていたことになるから、医師としての務めは十分果たせるようになっていたと考えてよいだろう。

以上は、三代出生から逆計算して考えてみたものだがいずれにせよ年老いて生まれた子供には違いないとしても、せいぜい六十歳までと考えるのが至当ではなかろうか。

同じ木立の岡山地区の外れ狩床という所に、後年になって三代春耕が別邸を構え、その隣に創建したという金刀比羅神社があり、裏山に由来を刻んだ記念碑がある。それによると、春耕は十五歳で医師の修業を始め、二十六歳の時、家業を継いだとなっている。また、彼には兄と姉が二人いたが、文面からは異母兄姉であったことが伺える。なお、二代の死亡時にこの兄が何歳であったのか、医師の修業をしていたのかも不明である。

鶴藩略史によれば、志幾子の死因は産後の肥立ちによるとなっているが、この時生まれたのは男の子で、後に水戸藩家老山野辺義胤の養子となった裟である。略史には、高慶が志幾子の死に際して落胆した様子を詳しく書いてあるが、私は、この死因に疑問を持っていた。

その理由は、諏訪神社が創建された享保四年から死亡した十五年までに、十一年の歳月が経っているということを念頭において考えると、先に述べたように、諏訪社は志幾子の要請によって高慶が創建したとされているから、当時四十五歳の高慶に対し、少なくとも彼女は二十歳を上回っていたと考えるのが普通ではなかろうか。

まさか十五や十六歳ではなかったと思う。それでは余りにも幼なすぎる。

ただ、高慶が二十歳から三十歳はじめの若さであったとすれば、話は違ってくる。しかし、最も寵愛された一人であったということ、死亡に対して随分心を痛めていたということ、五年前の正徳四年には正室混子とも死別しているなどから、若くて美しい志幾子を掌中の珠の如く愛しんでいたと考えられないこともない。もし、そうであったとすれば、死亡時には三十歳前となるので、産後の肥立ということも理解できる。

ところが、問題はただ兄春耕の年齢である。前にも述べたが、享保四年に志幾子が二十歳であったと仮定すれば、三代春耕は六十四、五歳の時生まれたことになるから、一般的に見て無理だと書いた。一方、志幾子の年齢が若くなればなるほど兄妹説は有望にはなるが、反面、諏訪社の創建を要請するほど信仰心と影響力があったか疑問となってくる。ただ、この年、十六歳の嫡男高通が廃嫡となり、代わって側室満勢子の方が生んだ年僅か三歳の大八郎（高能）が世継として決められるなど、藩政に暗い影が漂っていた時期だけに、あるいは心の拠り所を諏訪明神に求めたのかも知れない。

また、別の藩政資料によれば、初代春沢の死亡から二年後の享保十二（一七二七）年秋には、木立村で大掛かりな狩を行っているが、その供の中に二代春耕の名前が出ているので、既に医師として家名を継いでいたことの証にはなる。しかし、このとき何歳であったかは知るよしもない。ただ、後年、優れた才能の持ち主であったとされる三代春耕でさえ二十六歳で家業を継いでいる。

そこで、仮りに三代と同じ二十六歳であったとすれば、六十歳前の子供となるから、親子関係は一応立証できる。また、それにつれて志幾子の死亡時年齢も下がってくるから、産後の肥立説も可能となるが、寺社記にいう諏訪社創建を要請した件とは余りに歳が若すぎて、この方は疑問に思えてくる。

この諏訪社と奥井氏の関係が、後になって、三代春耕が同じ木立に別邸を構え、「金刀比羅神社を創建する結果となった」と考えてよいだろう。それは、諏訪社が志幾子の要請によって祭祀されたと信じて疑わなかったからである。

こうして見ると、享保四年には、志幾子の年齢は二十

歳すぎか、あるいはもっと多い、人格も備わった年齢であったと見てよいだろう。そうすると、三十歳後の出産となるので、死亡原因には繋がりやすいが、果たして当時の女性に子供を出産する体力があったか疑わしくもあり、また、その歳になるまで夜とぎをしていたかも不明である。

高慶が藩主となって初めて佐伯に帰ってきたのは、二十七歳の時であると書いた。初代春沢はこの後藩医として登用されている。それも家老某の推挙によって行われたに違いない。

話が飛躍して申し訳ないが、もし、この家老某が春沢の治療を受けていたころ、志幾子のことを知っていたとしたらどうなるだろう。佐伯に帰った藩主は二十代半ば初めてのお国入り故側室もいないということになれば、家臣として動くのも当然である。このころ、十六、七歳の志幾子が選ばれて側室に上がったとすると、享保四年には三十四、五歳になり、分別盛りの歳ごろとなるから全てに納得がいく。また、死亡時には四十五、六歳になるので、永年にわたって仕えた手前、高慶も哀悼の念を捨て切れなかったと考えてよいだろう。気掛かりなことは江戸時代の大名の家では、大方は三十歳を越えると、家臣に縁付けたり、出産の有無を確かめたうえで暇を取らせていた。毛利藩でもそのようにしていたのかよく分からないが・・・。

そのように考えてみると、鶴藩略史にいう産後の肥立とは関係がなくなるが、側室が七、八人もいたというから、あるいは外の側室と混同したと考えられないだろうか。

実は、そのことについてそれを裏付ける資料がある。それは、昭和五十年六月、会員の梅木幸吉氏がまとめた『覚え書き佐伯文庫の一部から』によると、文庫を創設した八代高標に多大の影響力を与えたという裴の経歴について詳しく書いている。それによると、生まれは享保十五年十月となっているから、志幾子が死亡した三ケ月後に誕生したことになり、親子でなかったことが立証される。死亡は天明六（一七八六）年七月となっている。

以上のことで、恐らく裴を生んだ側室が生産後死亡したため、その三ケ月前に死亡した志幾子と混同したのではないかということが分かった。したがって側室No.1というのは奥向きの実力者であったと考えてよいだろう。

そうすれば年齢的にも老女であったと推測されるから、側室第一号として仕えた女性ではなかったかということである。殊に、正徳四年、四十歳の時には正室と死別しているから、国元の奥を束ねる者として必要であり、且つまた、文才もある優れた女性であったに相違ない。でなければ、智覚院殿などという法名はつけなかっただろう。

さて、毛利家系譜によれば、高慶には八男四女の子供があり、褧は十一番目の子供である。このあとに皆子という女の子が生まれているが、これは多分、高慶六十歳前のことと思う。

なお、享保二年から志幾子が死亡した十五年までの十三年間に、大八郎（高能）・信之・富子・弁子・褧と五人の子供が誕生している。

実は、この中で高能と褧を除く三人のうち、何人が志幾子の生んだ子供か分からない。もっとも、若い時、側室に上がったとすれば、十一年間だけでも少なくとも一人や二人は生んでいた筈で、七、八人の側室中No.1であったとすれば尚更である。

しかし、本当は子供を生まなかったかも知れないし、反対に三十歳過ぎての初産（死産ではなかったか）であったため、命を落したのかも知れない。それが混同した原因となったのではないだろうか。そうなれば、兄春耕は六十歳を過ぎてのち三代が誕生したことになるので、今度はこちらが疑わしくなってくる。なんとも不可解な間柄のような気がしてならない。

高慶の子供たち

高慶
- 高通
- 7高丘
- 8高標
- 津礼子
- 亀三郎
- 千代熊
- 千吉
- 成五郎
- 高能
  - （大八郎）
- 信之
  - 南部養信養子
- 富子
  - 松平直道室
- 弁子
  - 大炊頭戸田忠言室（下野足利）
- 褧
  - 水戸藩山野辺義胤養子後に離縁
- 皆子
  - 大久保教純室後に離婚

（佐伯市史より）

奥井氏の系譜

初代春沢
- 二代春耕
  - 春亮
- 志幾子？
  - 女
  - 三代春耕

（益田学著佐伯の碑文より）